

健康・医療・介護・福祉ニュース

◆ 最新の健康・医療・介護・福祉などに関するニュースを集めて紹介します。

地域医療の

架け橋に

1

■ 奈良医療センター

国立病院機構奈良医療センター神経内科では、脳神経の難病を専門的に診療しています。具体的な病名としては、パーキンソン病といった比較的よく知られているものから、筋萎縮性側索硬化症(ALS)や脊髄(せきずい)小脳変性症、多系統萎縮症などの難しい病名のものまで、様々(さまざま)なものがあります。

このような脳神経の難病は、比較的まれな病気ではありますが、高齢化社会の進展に伴い、患者数は近年増加してきています。

なぜ脳神経の難病にかかるのか、その根本の原因はいまだよく分かっていません。しかし、病気になる過程はだいぶ分かっています。

それは、脳神経細胞に、長い年月にわたって(場合によ

脳神経の難病と現状

国立病院機構奈良医療センター 松村 隆介
神経内科診療部長



松村 隆介
神経内科
診療部長
【略歴】平成元年、奈良県立医科大学卒業。同年、同神経内科講師、米国ソーク研究所研究員。同22年から現職。

ては10年以上、異常なタンパク質が少しずつたまり、それによって神経細胞の機能が障害されて病気になるといえます。このことから脳神経の難病は、加齢とともに起こる

これらの薬をつまみ合わせて治療することで、病状を長年にわたってコントロールすることが可能になっています。

また、将来的に期待される

新薬や再生医療注目

りやすくなると考えられ、高齢化社会において患者数が増加する一因となっています。

では、脳神経の難病の治療の現状は、どうなっているのでしょうか。例えばパーキンソン病では、表に示した通り、現在では10種類以上の薬が使えるようになってきました。

しかも、これらの半数以上は21世紀になってから登場したものであり、薬の開発が急速に進んでいることがわかります。パーキンソン病では、

対するiPS細胞を使った再生医療(移植手術)が、京都大学で現在計画されており、数年以内には臨床試験が行われる方向です。

さらには、様々な脳神経の難病患者から作製したiPS細胞を神経細胞に変化させ、その細胞に対して治療効果のある薬を探すといった研究も盛んに行われています。この方法で、新しい薬が発見されることが期待されています。

パーキンソン病治療に使われる主な薬

薬(成分名)	発売開始年
トリヘキシフェニジル	1953年
アママンタジン	1975年
プロモクリプチン	1979年
レボドパ・ベンセラジド	1980年
レボドパ・カルビドパ	1980年
セレギリン	1998年
プラミベキソール	2004年
ロビニロール	2006年
エンカカボン	2007年
ゾニサミド	2009年
アポモルヒネ	2012年
ロチゴチン	2013年
イストラデフィリン	2013年

治療法として、iPS細胞を使った再生医療があります。実際、パーキンソン病患者に

また、脳の病気では、リハビリの重要性を忘れてはなりません。脳には、ダメージを受けた神経細胞のかわりに、その周辺の神経細胞が新たなネットワークを作り、機能回復を促す仕組みがあります。その能力を引き出すためにも、リハビリが重要になってくるのです。

脳神経の難病で相談があれば、まずは当院などの専門医療機関を受診していただければと思います。

● 次回は5月25日付掲載予定

今回から、国立病院機構奈良医療センター(奈良市七条2丁目)の先生方に、難病など様々な病気に対する最新の治療法や予防策などについて、分かりやすく解説していただきます。

独立行政法人
国立病院機構奈良医療センター
星田 徹院長
電話0742 (45) 4591